



映像および記録: <https://youtu.be/uKtMs6K1igg>



人間性の実践

2020-2022

インスタレーション・スケッチ (プロジェクター、段ボール2枚、段ボール箱、チューブ、発泡スチロール)

所要時間: 2分 30秒

アーツ前橋 (群馬) でのプロジェクト『追熟と訛り』の一部として

世界的、歴史的な争いを捉えた写真のスライドショーと、これらの分裂、紛争の舞台となった土地での自身の私的体験を語る女性の声で構成される映像。二つの展示室をつなぐ階段の途中にある、小さなほこりっぽい倉庫の中で二枚の段ボールに投影するという、「クリーン」「クリア」ではない提示で、力強さや荒々しさの獲得を試みた。

対立と交換の証人として

『人間性の実践』は2020年にスウェーデンの離島で書き、日本の美術館で発表した短いエッセイで、オーストリア、南アフリカ、ラトビア、ロシアといった、プロジェクト『追熟と訛り』(2018-)の舞台において私自身が直面した対立と分裂について、そして南アフリカでの人種間の摩擦と外国人差別の暴動へのリアクションとして実施した協働のワークショップ『文字の動き』(2019-)とそこにあふれた、人々の感情表現と触れ合いについて述べている。

「弱さ」と「向こう側」というインスピレーション

このエッセイをボーカル・パフォーマンスへと発展させ、私自身の声で淡々と語り出し、結びの部分で控えめに感情を表した。黒い画面のあいだにエッセイの内容に関連する世界的、歴史的な出来事や抗議活動などの記録写真やニュース写真が映し出されるスライドショーをこの音声と掛け合わせてビデオを制作。

聴こえていても意味を聞き取るのがむずかしい、という聴覚情報処理障害をわずかながら持ち、世界を体験し知覚する上で「向こう側」にこのような、動画を見るのが好きな人、文字を読むのが苦手な人、字は読めても意味をつかみにくい人に、自分の「ことば」を伝えたいというのも、ことばを音として載せたビデオというメディアをもちいるきっかけとなった。

インスタレーションのセットアップ、そして大文字の歴史と私的な物語の対比はどちらも、自身の弱みと思っている部分を克服しようとする試みの現れでもある(私の地声は「ダイナミック」でも「ラフ」でもなく、丸みを帯びて未熟にも聞こえる: 歴史は「記念碑的」であり、私の物語は小さく、はかない)。

『人間性の実践』のスクリプト*

*全文は別紙

アメリカとロシアが冷戦後最大のスパイ交換を行ったのはウィーン空港だった。「自分にとって『最も遠い人』は誰？」そこに住むクルド系イラン人の女の子に尋ねると、少し間を置いて、イスラエル人、と答えた。

アパルトヘイト撤廃から二十五周年を祝う南アフリカでは、色だけでなく、訛りが対立のしるしとなり、他のアフリカ諸国から来た人々への暴力というかたちで日常への不満が露わとなった。

ソビエト連邦の崩壊でその支配から自由になったラトビアでは、ラトビア語とロシア語がまちを二分し、旧ソ連につながるものを否定する人々は「〜でない」ことで自分らしさを確かにしようとしていた。

世界は大きく動いたし、動いている。そして複雑に絡み合ってる。

かつて民主化の道をたどった社会や自由を得た人々の今に見えるのは新たな人との隔たり、また別の何かとの相容れない日常。

その「反」の動きは、さまざまなかたちの人間らしさを明らかにする。逆らう、抗うという行為は深い感情に根ざしていて、そこで起きる摩擦は活気と熱意を与え、世界のなかの自分のを積極的に省み、実現し、心の動きが発露する、凝縮された瞬間のようにも映る。



(左ページ) ビデオのスライドショーに使用されている世界の分断と歴史的出来事の一部 (右ページ、上) プロジェクション部分のインスタレーション風景 (右ページ、下) 2枚の段ボールを投影用スクリーンとして使用したインスタレーションのセットアップ; 倉庫のドアと展示室のある階を結ぶ階段を含むインスタレーション風景

